

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月2日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16613

研究課題名（和文）現代哲学における特異性概念の探究 ナンシー哲学研究から出発して

研究課題名（英文）Concept of singularity in contemporary philosophy : From the research on the thinking of Jean-Luc Nancy

研究代表者

柿並 良佑 (Kakinami, Ryosuke)

山形大学・人文社会科学部・講師

研究者番号：40706602

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：現代哲学でしばしば用いられる「特異性（singularity）」という概念の分析を継続して行った。思想家によってその規定や用法は異なるが、特にジャン＝リュック・ナンシーやフェリックス・ガタリのテキストをとりあげ、個性性、主体性との区別の可否、過程（プロセス）的性格の有無、集団的実践との関わりなどの観点から検討した。成果は論集への寄稿、論文・学会発表、関連文献の翻訳などの形で発表された。

研究成果の概要（英文）：In this research project, the concept of “singularity” was analyzed consistently, which is frequently used in the domain of contemporary philosophy. Depending on different thinkers, its definition and/or its use is varied; focusing particularly on the texts by Jean-Luc Nancy and Felix Guattari, we examine them from the point of view of differentiation from the individuality and subjectivity, characteristics of a process, relation to the collective praxis, and so on. The results were published by the contribution in books, papers, translation of important references.

研究分野：哲学

キーワード：現代哲学 存在論 ヨーロッパ思想 政治哲学 共同体

1. 研究開始当初の背景

ドゥルーズ&ガタリ、デリダ、ラカン、バディウなど、現代フランス哲学の様々な著作において「特異性」という語がしばしば用いられる。本研究が出发点とするジャン＝リュック・ナンシーの哲学では、「個性性」が自分で自分自身を基礎づける自己充足的な主体の特性と捉えられ、明確に区別された上でこれに代わる存在が、つねに複数で共に在るものとして「特異＝単独存在」と呼ばれる。『無為の共同体』、『単数にして複数の存在』などの著作では、「単数＝特異 (singulier)」であると同時に複数である存在をめぐる思考が全面的に展開されている。かくして「特異性」という概念はナンシーの哲学を形成する重要な因子の一つとなっているが、その同時代的・思想的意義の解明は先行研究などでも十分になされてこなかった。

2. 研究の目的

特異性概念をめぐる先行研究はいくつか現れてきているものの、いずれも特異性を断片的に描き出す試みにとどまっている。本研究はそれらの成果を踏まえた上で、明確な見通しの下に特異性概念の内実・意義・問題圏を整理し、提示しようとするものである。本研究の目的は具体的には以下の3点に要約される。

(A) 特異性概念の思想史的探索：

ナンシーの用いる特異性概念は直接的にはヘーゲルに起源を求めつつも、より遠く古代中世哲学の伝統を汲んでいる。ドゥルーズがドゥンス・スコトゥスを参照しながら用いた「此性 (heccité)」という概念もナンシーが意識していたものであるが、そのような用法も考慮に入れて、個体化概念の20世紀における展開として思想史的に特異性概念の生成を跡づける。

(B) 特異性概念の同時代的布置：

ナンシーやジャン＝フランソワ・マルケは自らの思想が他の思想家と同時代性を共有していることを明言している。この視点からドゥルーズやデリダ、アガンベンらの思想の内に見られる特異性概念の共通点と相違を浮かび上がらせ、現代哲学の布置を描き出す。その上で、同 他 をめぐる20世紀思想のさらなる鍵語として特異性を位置付ける。

(C) 特異性概念の神学的・宗教論的意義の検討：

特異性概念は事物や主体をモデルに形づくられた個体概念に代わる、いわば前 個体的な発生の場面に目を向けるために着想されたものであり(ドゥルーズ) また 我々が絶対的に単独でありながら複数でしか存

在しないという特殊な存在論的構造を示すために用いられている(ナンシー)しかし、キリスト教的伝統を有する西洋哲学にとってこの語は歴史的・一回性を帯びた キリスト という形象とも結びついている。かくして、特異性概念が「神の死」以降の哲学にとってどのような意義を持つのか、あるいはポスト世俗化という今日の文脈において宗教的な意匠を再度まとうのかという問題が新たな争点として浮かび上がってくる。本研究は特異性概念の意義を最終的にこの側面において問うものである。

3. 研究の方法

20世紀フランス哲学史における「特異性」概念の検討のため、本研究は上に記した(A)特異性概念の思想史的探索、(B)特異性概念の同時代的布置、(C)特異性概念の神学的・宗教論的意義の検討、の各段階にそれぞれ一年度を充て、多面的に進められる。

研究に当たっては、従来の文献調査、読解、考察、論文執筆の過程を経ることはもちろんだが、国内の研究者との協力体制も重視し、適宜研究会やリサーチ・ミーティングを開催する。

また海外の研究者との連携を推し進めていくことも念頭において、渡航によるミーティングあるいは共同討議やワークショップなどの方法をとって、個人研究の障壁を乗り越える。

主として各年度の前半では文献収集・読解の作業を、後半では研究発表・論文執筆の作業を行い、第三年度終了時にはまとまった形で成果公表を目指す。

4. 研究成果

初年度は基礎文献読解と資料調査にあてられた。研究会などの開催の関係上、初年度から思想史的探索と同時代的布置を探る作業を並行する形で行うこととなった。特にドゥルーズとの著作も多くあるフェリックス・ガタリの用法に注目し、ナンシーと対比することで、主体性・個性性といった概念と特異性概念の差異および近接を中心に分析を進めた。

資料調査の面では年度末の春季休暇期間を利用してフランスに滞在し、パリの国立図書館で作業にあたった。また滞在中、ストラスブルグにも赴き、哲学者ジャン＝リュック・ナンシーと会談を行い、次年度以降の共同研究体制の基礎とすることができた。

あわせて、本研究と関連の深いナンシーとラクー＝ラバルトの論文を翻訳・刊行することができた(成果、〔その他〕)

二年次は一方で前年度の作業を継続する形で進められた。刊行は最終年度に繰り越されたが共著への寄稿という形になった(『つ

ながり の現代思想』〔図書〕 ）。他方、特異性の抽象的概念化と並行して、いわゆる具体的な事柄として「愛」を取り上げ、思想的作業に接続しつつ非弁証法的な愛概念が特異性の一例となる可能性を示唆した。その成果は「非恋愛論」(〔論文〕)として刊行された。

夏季にはフランス国立図書館での資料調査を進めたほか、哲学者ジャン=クレ・マルタンとも会談し、特異性概念の帰趨について議論を行ったほか、今後の研究協力体制についても検討した。

また前年度に引き続き、国内の研究者の協力も得て、ジャン=リュック・ナンシーの招聘計画を実質的に推進した。

三年次はこれまでの研究を継続しつつ、特異性概念の神学的・宗教論的展開を追う作業を行った。その成果の一端として、年度初頭にはバタイユ・シンポジウム開催、およびそれに伴うジャン=リュック・ナンシー氏の招聘を実現した。不慮のトラブルにより残念ながらシンポジウム当日のナンシー氏の講演はキャンセルとせざるを得なかったが、研究協力者との連携によって関連するセミナー等を開催することができた。シンポジウムの成果は、関連研究の翻訳紹介等とあわせて論集という形で刊行が決定している(2018年・夏頃)。当該シンポジウムでの自身の発表は当然ながら本研究計画の一部をなすものであり、特異性概念の内実を明らかにする一つの軸をバタイユとナンシーという思想家の交流に見出しつつ、「アドラシオン」¹⁾、「身振り」²⁾、「欲動」³⁾等々の概念に託して提示するものとなった(〔学会発表〕)。

また特異性が担保されるための空間としての「共同体」概念については、アーレント研究会で発表の機会を得た(〔学会発表〕)。アーレントの公共空間に対するナンシーの評価ならびに留保の読解可能性をめぐって一つのたたき台を提出してみたが、今後、特異性概念の政治思想における系譜を辿る視点を再検討するための布石となるだろう。研究会報『Arendt Platz』に発表の骨子は公開されているが(〔その他〕)、これをあらためて前年度までの研究にフィードバックしつつ、より完全な形での公開を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

柿並良佐「文学を語/騙るのは誰か?——ラクー=ラバルト&ナンシーのミメシス論から」、『Nord-Est』、査読無し、日本フランス語フランス文学会東北支部会報、第 10 号、2017 年 5 月、29-34 頁。

柿並良佐「非恋愛論——« Ceci n'est pas un

(traité de l') amour »— de Jean-Luc Nancy」、『人文学報』首都大学東京人文科学研究科・人文学報編集委員会、第 513-15 号、2017 年 3 月、121-151 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

柿並良佐「思考と動くもの、その身振り、その空間——アーレントとナンシーの間」¹⁾、シンポジウム「哲学と政治——フランス・イタリア思想におけるアーレント」²⁾、アーレント研究会、慶應義塾大学三田キャンパス、2017 年 9 月 9 日。

柿並良佐「人間(オム)なきオマージュ——バタイユとナンシー、思考の身振りと力」¹⁾、ジョルジュ・バタイユ生誕 120 年記念国際シンポジウム「神話・共同体・虚構——ジョルジュ・バタイユからジャン=リュック・ナンシーへ」²⁾、慶應義塾大学・三田キャンパス、2017 年 4 月 23 日。

柿並良佐「文学を語/騙るのは誰か?——ラクー=ラバルト&ナンシーのミメシス論から」¹⁾、日本フランス語フランス文学会東北支部大会、シンポジウム「フィクション化する世界」²⁾、2016 年 11 月 26 日、山形大学・小白川キャンパス。

柿並良佐「「新たな神話」新論——あるいは「途絶」のやり直し」¹⁾、表象文化論学会、パネル 5：神話と共同体——ジャン=リュック・ナンシーの近著『本来的に語ると——神話についての対談』を中心に²⁾、2016 年 07 月、立命館大学・衣笠キャンパス。

〔図書〕(計 2 件)

松本卓也・山本圭(編)『つながり の現代思想——社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析』明石書店、2018 年(担当箇所：柿並良佐、第六章「特異性の方へ、特異性を発つて」¹⁾、161-200 頁)。

齋藤元紀・増田靖彦(編)『21 世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』ミネルヴァ書房、2016 年(担当箇所：柿並良佐、第一章「哲学と政治の問い」²⁾、3-22 頁)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

柿並良佐「思考とその運動、その身振り、その空間——アレントとナンシーの間」(発表報告)『Arendt Platz』アレント研究会、第3号、2018年3月、2-6頁。

柿並良佐「『存在と時間』という豊饒な書物に、読者を哲学することへと誘う——ニュースクール・フォー・ソーシャル・リサーチでの講義録(書評)『図書新聞』第3332号、2017年12月23日付。

石川学・柿並良佐「バタイユ・シンポジウム報告」、『REPRE』表象文化論学会ニューズレター第31号、2017年11月
(<http://www.repre.org/repre/vol31/topics/01/>)

ジャン=リュック・ナンシーのインタビュー映像・字幕翻訳作成、乙幡亮・柿並良佐、2017年11月
(<https://www.youtube.com/watch?v=roMH14548WQ&feature=youtu.be>)

フィリップ・ラクー=ラバルト、ジャン=リュック・ナンシー「政治的なものの「退引」」、柿並良佐訳、『思想』、岩波書店、2016年9月号、7-33頁。

柿並良佐「「名」の拒否——『エマク・バキアを探して』」、『スプートニク(山形国際ドキュメンタリー映画祭公式ガイドブック)』、2015年10月。

柿並良佐「ルソー、共 と 感覚 の喪失に抗して」、『プレテクト ジャン=ジャック・ルソー』2016年5月
(http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg03d_160504224717)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柿並 良佐 (KAKINAMI, Ryosuke)
山形大学・人文社会科学部・講師
研究者番号：40706602

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

市川 崇 (ICHIKAWA, Takashi)
渡名喜 庸哲 (TONAKI, Yotetsu)
松本 卓也 (MATSUMOTO, Takuya)
山本 圭 (YAMAMOTO, Kei)